

# オンライン対面併用型大規模講義科目における オンラインインタラクションに関する考察

橋本 諭<sup>\*1</sup>

Email: hashimos@mi.sanno.ac.jp

\*1: 産業能率大学 情報マネジメント学部 法政大学 経営学部 兼任講師

◎Key Words オンライン対面併用型, 講義科目, グループワーク,

## 1. はじめに

2020年度大学では、Covid-19対策としてのオンライン授業対応を余儀なくされた。2023年現在、多くの大学においてキャンパスでの対面授業が2019年度以前と同様の形で戻ってきている。

この間の変化は、コロナ禍への一時の対策としてオンライン化が行われ、また元に戻るということではなく、教授者および学生にとってオンライン授業に関する新たな教授手段および学習手段の獲得という不可逆な変化が起きたと考える。

本稿では、ICTツールを用いたオンライン授業という新たな教授手段および学習手段を対面授業の中でどのように用いていくのかについて、特にオンラインインタラクションに関する検討を行う。具体的には、筆者が兼任講師をつとめている法政大学経営学部『組織論入門』において実践した2022年度(春・秋学期)および2023年度(春学期)の授業設計、授業実施結果を元に、オンライン授業と対面授業を併用する形でのオンラインインタラクションについて考察する。

## 2. コロナ禍を経た学習環境の変化

### 2.1 コロナ禍と大学教育

コロナ禍当初、大学は混乱の中にあった。文部科学省による調査によれば、2020年4月10日時点での今後の授業方針について、47.4%が遠隔授業を実施すると回答したが、37.0%は検討中であった(実施予定はないが11.0%)<sup>(1)</sup>。多くの大学および大学教員は初めての取り組みとしてオンライン授業および遠隔授業を行うことになった。同年7月1日時点での実施状況調査によれば、面接(対面授業)・遠隔を併用した授業実施が60.1%であり、(全面的な)遠隔授業が行われたのは23.8%であった。なんらかの形での遠隔授業が83.9%の実施されたことになる<sup>(2)</sup>。しかしながら、その実態は飯吉(2020)が2020年度前半を振り返り「コロナ禍下における今年度前半、止むを得なかったとは言え、多くの大学では、『授業をオンラインで行うこと』が目的化してしまっていたのではないだろうか」と指摘するように、コロナ禍において「学びを止めない」ことを旗印とし、突貫工事的にオンライン化が進められることになったと言えよう<sup>(3)</sup>。

### 2.2 教授者、学習者としてのツールの獲得

2023年現在、コロナ以前と同様の授業を実施できる状況となっている<sup>(4)</sup>。そして、コロナ禍への対応の結果、いくつかの大学では対面授業をオンライン配信(ハイフレ

ックス型)する設備が導入されるなど、コロナ禍を経たことで新たな学習環境を有することとなった。

辻ら(2023)は、オンライン授業について、ICT利用状況に基づき分類を行っている。「講義科目」、「演習・実習科目」、「ゼミ・セミナー科目」の授業形式に分け、ICTの利用状況に応じてさらに細かくクラスター分析により分類している。「講義科目」においては、リアルタイム主体・アクティブラーニング型講義、リアルタイム主体・一方向説明型講義、オンデマンド主体・課題確認型講義の3つに分類している。オンライン授業とは大枠の分類に過ぎず、ICTの利用の仕方に応じて異なる授業となる。つまり、担当教員の授業設計意図により、ICTをどう授業に取り入れるかは異なり、結果として異なる授業となる<sup>(5)</sup>。

長岡(2020)は、zoomを用いたリアルタイム主体の講義を行いつつ、Twitterを用いた受講生と教員間のインタラクションを実現している。「知識習得よりも考える力の醸成を目指す」という教員の授業設計意図があり、その実現のためにICTツールを活用している<sup>(6)</sup>。なお、長岡(2020)における双方向性とは、受講生同士のオンラインツールを通じた対話ではなく、Twitterを用いた双方向(受講生と教員、受講生同士)のやりとりである。それらは、授業の設計意図に沿った双方向のやりとりとなっていることに加え、オンライン授業においては、やりとりが活発化したことが示されている<sup>(6)</sup>。

他方、学習者としても新たな学習のためのツールを獲得したと言えるだろう。

2021年3月の文部科学省による学生に向けた調査において、オンライン授業に対して56.9%が「満足」か「ある程度満足」と回答している。また、問題点を指摘する声があるものの「自分の選んだ場所で授業を受けられた」などの肯定的な意見もあり、今後のオンライン授業に関して、「コロナ禍以前に戻ることもなく、新しい大学の在り方を考えてほしい」といった声も挙げられている<sup>(7)</sup>。

植原(2020)では、学生側の意見として、通学の時間を節約できることや、他キャンパスの授業を受けることができるといった地理的な制約を取り除けること、「周りに気をつかわないですむ。集中力が上がる」といった、オンライン授業ならではの利点が挙げられている<sup>(8)</sup>。

### 2.3 今後の授業設計における課題

コロナ禍によるICTツールを用いたオンライン授業は、教授者として授業設計上の新たなツールと捉えることができる。また、学習者としてもICTを用いたオンライン授業というツールが利用可能であり、メリットを有する

ことがわかったとも言える。

そのため、今後の授業設計を考える場合には、ただICTツールを使うのではなく、そのツールの特性を理解した上で、授業設計意図に合わせた学習環境デザインの一環として、「どう使うか」こそが重要な論点であるといえよう。

### 3. 授業設計

#### 3.1 授業概要

筆者が担当する『組織論入門』は、受講者数が120名以上、最大190名程度の履修者となる大規模講義型科目である。学部における位置付けは、「専門入門科目」という「専門科目を学ぶ上での基礎として位置付けられる科目群」に属している。同科目群には、『組織論入門』のほか、『戦略論入門』、『マーケティング入門』、『ファイナンス入門』、『簿記入門Ⅰ/Ⅱ』、『経済学入門』、『統計学入門』、『情報学入門Ⅰ/Ⅱ』の10コマが配当されており、うち7コマ(2単位×7コマ=14単位)以上が選択必修となっている。「なるべく多くの科目を、1年次のうちに履修しておくことを強くお勧めします」とアナウンスされており、履修者は1年生が大多数である(年度によっても異なるが8割程度は1年生。ただし、2年生以降も受講可能<sup>9)</sup>)。春学期、秋学期に2コマずつ開講されており、筆者は両学期1コマずつ担当している。なお、同時期に別教員も実施しているが、シラバスも異なり、授業実施方法も異なっており、互いに関係はしていない。

『組織論入門』の目的は以下の3点を設定している<sup>10)</sup>。

- ① 経営学における組織論に関する基礎的な内容を広く学習する
- ② 経営学のモノの見方を学ぶ
- ③ 今後の学習へのガイド

これは、専門科目ではあるが「組織論」以外の内容に興味関心を有する学生が受講することを想定しているからである。前述のようなカリキュラムの位置付けを想定した上で、「組織論」を自らの専門とするか否かに関わらず、また、現時点での興味関心の有無を問わず、「組織論」に関する内容を理解することを目的としている。そして、「組織論」を通じて、経営学が有する企業の視座を理解することを目指している。さらに、入門科目であることから、カリキュラム上設定されている上位科目で学ぶであろうことを予告し、興味関心を喚起することを狙っている。

#### 3.2 2021年度までの授業設計(完全オンライン授業)

筆者は『組織論入門』を2019年度のカリキュラム変更に伴い新設された際より担当している。コロナ禍以前である2019年度には、対面での講義型科目として運営した。講義を中心に行い、適宜周囲の受講生とのディスカッションを行う時間を設けてはいたが、グループメンバーを指定したディスカッションの時間などは設けていなかった。

2020年度、2021年度はコロナ禍への対応としてzoomを用いた完全オンライン授業として実施した。主な授業設計は以下の通りである。

#### ① 授業内容：

- 2019年度から毎回の授業テーマに変更なし。なお、表1に示す通り2023年度まで変更はない(授業で扱う内容は変化している)。

#### ② 授業スタイル：

- オンライン講義はzoomを用いたライブ授業とする(授業時間に配信を行う)
- 資料は学部指定の授業支援システム(LMS)上に事前にアップする
- 講義部分は録画し、Youtubeに限定公開でアップした上でLMSからリンクする
- 毎回の授業中に2回、zoomのブレイクアウトルーム機能を用いてディスカッションを行う
- 出席は取らない(成績判定にも含まない)

#### ③ 授業の進め方(100分)：

- 前回の振り返り 15分
- 当回の授業項目に関する講義① 25分
- ブレイクアウトルームでのディスカッション① 10分
- ディスカッション内容の共有 5分
- 当回の授業項目に関する講義② 25分
- ブレイクアウトルームでのディスカッション② 10分
- ディスカッション内容の共有 5分
- まとめ 5分

2019年度との比較において、特徴として挙げられるのが、ブレイクアウトルームを用いたディスカッションである。完全オンライン授業において他の学生とのコミュニケーションを取るために設定を行なった。

授業参加者をランダムで3人から4人のグループを作成し、講義に関連した内容の話し合いを行なってもらう。なお、授業において2回実施するが、この2回のメンバーは同一にしている。

#### 3.3 完全オンライン授業における利点と課題

2020年度、2021年度は完全オンライン授業として実施した。授業実施において、zoomを用いたオンライン講義については、通信環境や受講環境に伴うトラブル等はなく、植原(2020)が指摘するようなメリットを感じる学生が多かった<sup>8)</sup>。

なお、学生同士のオンラインインタラクションであるブレイクアウトルームを用いて行うディスカッションについては、利点と課題が示された。

利点としては、当初の設計の通り、他の学生とのやりとり自体が好評であった。コロナ禍の中で、外出も制限される中、同じ学部の学生と話をする機会が評価された。なお、毎回の授業で別々の人とグループをランダムに組むことは、対面授業の際には事前準備の労力をかなり必要とするが、オンライン環境下では簡単に行えるため、授業設計上の利点であるといえる。

他方課題としては、毎回別々の人たちとグループを組むことにより、毎回初対面のような状態になり、授業をまたいだ積み重ねができない点が挙げられる。

### 3.4 2022 年度, 2023 年度の授業設計 (オンライン授業対面授業併用型)

表 1 組織論入門 (2023 年春) の授業内容

|        | 授業形態  | テーマ                          |
|--------|-------|------------------------------|
| 第 1 回  | オンライン | オリエンテーション                    |
| 第 2 回  | 対面    | 経営学とは何か (1)<br>株式会社・ステークホルダー |
| 第 3 回  | オンライン | 経営学とは何か (2)<br>働き方・採用・キャリア   |
| 第 4 回  | 対面    | 組織マネジメントとは                   |
| 第 5 回  | オンライン | 事例講義 (ゲスト講義)                 |
| 第 6 回  | 対面    | 組織マネジメント<br>組織を取り巻く課題        |
| 第 7 回  | オンライン | 組織文化                         |
| 第 8 回  | 対面    | 組織開発                         |
| 第 9 回  | オンライン | 人材マネジメントの範囲と内容               |
| 第 10 回 | 対面    | 人材マネジメントの現代的課題               |
| 第 11 回 | オンライン | リクルーティング                     |
| 第 12 回 | 対面    | 人材育成                         |
| 第 13 回 | オンライン | 事例講義 (ゲスト講義)                 |
| 第 14 回 | 対面    | ラップアップ                       |

2022 年度からは、オンライン授業と対面授業を併用する形で実施している。2021 年度との差異は以下の通りである。

- ① 授業内容：
  - 変更なし
- ② 授業スタイル：
  - 対面授業の場合は、教室にて講義を行う。オンライン講義は、zoom を用いたライブ授業とする。なお、対面での受講が難しい学生に向けて対面授業の内容も zoom を用いたハイフレックス型として配信を行った (授業時間に配信を行う)
  - 対面・オンライン共に講義部分は録画し、Youtube に限定公開でアップした上で LMS からリンクする
  - オンライン授業においては、授業時間中に 2 回、zoom のブレイクアウトルーム機能を用いてディスカッションを行うが、対面授業の場合は実施なし
  - ディスカッションのメンバーは 6 名ないし 7 名を指定し、学期の間変更しない
  - オンライン・対面授業において、別途チャットツール (slack) を用いたインタラクション環境を整備した
  - 出席については変更なし
- ③ 授業の進め方 (100 分)：
  - オンライン授業の場合には変更なし。
  - 対面授業の場合は、ディカッションの時間 (20 分) を講義の時間に配当した。

大きな変更点としては、チャットツールの導入とディ

スカッションのメンバーの固定である。

チャットツールの導入は、オンライン授業実施時の学生の環境が多岐に渡ることが予想されたことが契機である。特に学生同士のインタラクションにおいてトラブルが生じる可能性があることから、状況の変化に依存しにくい (会話はできなくとも、チャットは打てる) チャットツールの導入を行った。

また、3.3 で述べたデメリットに対応するためにメンバーを固定化することとした。メンバーは原則ランダムで割り振った。なお、初回授業においてアンケートを実施し、「大学で学びたいこと」を聞き、その内容から近いキーワードを有する人たちはできる限り同じグループとするように設定した。そして、授業以外の時間においてもやりとりを可能とするためにチャットツールを用いている。

### 3.5 チャットツール (Slack) の設定

Slack は初回の授業 (オンライン) でアナウンスを行い、第 2 回授業 (対面) において slack にログイン参加できない人へのサポートを行った (欠席者は第 3 回以降に個別対応)。

やりとりを行うチャンネルは事前に作成しておき、事前に招待をしておいた。チャンネルは、授業についての連絡を送る「全体連絡 (学部指定の LMS にも同一内容を送付する)」, 学生全員が参加しオンライン授業対面授業共にリアルタイムで授業に関する質問感想などを投稿する「授業コミュニケーション」、それぞれのグループごとの「小グループ (BOS\_01 などと表記)」である。なお、すべてのグループには教員および授業アシスタントが入っており、すべて他の受講生も閲覧可能な公開チャンネルでやりとりを行うこととした。

## 4. 実施結果

### 4.1 Slack への投稿状況

Slack への投稿状況は表 2 の通りである。

オンライン授業時、対面授業時にリアルタイムでの投稿を行う「授業コミュニケーション」は授業期によるばらつきがあるものの、授業期間を通じて投稿が行われ続けた。書き込まれているのは、講義内容の感想や、講義を通じて気づいた点などである。

また、小グループへの投稿については大きくバラツキが生じている。

表 2 授業別 Slack 投稿状況

|             | 2022 春 | 2022 秋 | 2023 春 |
|-------------|--------|--------|--------|
| 履修者         | 168 名  | 128 名  | 157 名  |
| 授業コミュニケーション | 473    | 198    | 309    |
| 雑談          | 65     | 24     | 11     |
| グループ平均      | 60.9   | 25.0   | 75.5   |
| グループ最高      | 457    | 54     | 132    |
| グループ最低      | 1      | 2      | 18     |

※2023 年度は 6 月 26 日 (第 11 週終了時点まで)

## 4.2 授業アンケート結果

2022年春・秋学期においては第14回授業の終了時にアンケート調査を行っている。Google フォームで作成し、授業支援システム上にリンクを貼り、授業内で回答を依頼した。学術研究に向けたアンケートであることを明記し、成績判定には用いないことおよび研究上利用する際には個人が特定されないことを条件とし、また、回答の有無も成績に反映させることはない旨伝えた上で回答を依頼した。その結果、2022年度春学期は、127/168名、2022年度秋学期は66/128名が回答を行った。

表3 授業別 授業コミュニケーションへの投稿状況

| 授業コミュニケーションへの投稿        | 2022 春 | 2022 秋 |
|------------------------|--------|--------|
| 指示があったときのみ投稿した         | 49     | 24     |
| 自主的に数回（1 から 3 回程度）投稿した | 33     | 18     |
| 自主的に（4 回から 6 回程度）投稿した  | 13     | 7      |
| 自主的に 7 回以上投稿した         | 6      | 1      |
| 投稿しなかった                | 24     | 15     |
| 未回答                    | 1      |        |
| 合計                     | 126    | 65     |

表4 授業別 小グループへの投稿状況

| 小グループへの投稿              | 2022 春 | 2022 秋 |
|------------------------|--------|--------|
| 指示があったときのみ投稿した         | 53     | 40     |
| 自主的に数回（1 から 3 回程度）投稿した | 34     | 18     |
| 自主的に（4 回から 6 回程度）投稿した  | 22     | 2      |
| 自主的に 7 回以上投稿した         | 10     | 2      |
| 投稿しなかった                | 5      | 3      |
| 未回答                    | 2      |        |
| 総計                     | 126    | 65     |

表3 および表4 が示す通り、各自の投稿状況にはばらつきがある。特に、自主的に多く（7回以上）投稿した人数には差がある。なぜこの差が生まれたのかを分析することが必要であろう。

## 5. 考察

4.1, 4.2 で示した通り、オンライン対面併用型の授業において、チャットツールを用いたオンラインインタラクションはツールとしての可能性を示せたと考える。他方、取組状況にはバラツキがあることから、今後の授業設計においては更なる検討が必要であろう。

なお、アンケートにおける自由記述には、オンライン授業と対面授業を併用することに対しては概ね好評価を得ている。しかし、2022年度春学期と秋学期を比較すると、春学期の方がオンラインと対面授業を併用することに対

する新鮮さがあつたようである。

2023年度は途中経過の報告であるが、2022年度を踏まえた授業運営上の工夫をいくつか行っている。授業における小レポートに slack やブレイクアウトルームでのディスカッションの内容を元に考察を求めること。対面授業の際にも、積極的に slack を用いたディスカッションを促すようにしている。

## 6. おわりに

本稿では、オンライン対面併用型大規模講義科目におけるオンラインインタラクションに関する考察を行った。コロナ禍を経て、オンライン授業というツールを得た中で対面授業と組み合わせる際に、どういったインタラクションの種類があり得るのかを考えた。チャットツールを用いたオンラインインタラクションはオンライン授業と対面授業をつなぐツールとしての可能性を示唆できたと考えるが、授業設計上においては課題もある。今後はどういった使い分けがあり得るのか、授業設計意図と合わせた形での受講者の活性化方法について検討していきたい。

## 参考文献

- (1) 文部科学省, "令和2年4月13日新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について" [https://www.mext.go.jp/content/20200413-mxt\\_kouhou01-000004520\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200413-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf) (2020).
- (2) 文部科学省, "令和2年7月17日 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況" [https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt\\_kouhou01-000004520\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf) (2020).
- (3) 飯吉透, "日本の大学はコロナ禍を成長と発展の再起点にできるか オンライン授業を超えて", アルカディア学報, 日本私立大学協会, (2020).
- (4) 文部科学省, "令和4年度後期の大学等における授業の実施方針等に関する調査", [https://www.mext.go.jp/content/20221129-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221129-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf) (2022).
- (5) 辻靖彦, 高比良美詠子, 稲葉利江子, 田口真奈 "コロナ禍におけるオンライン授業の ICT 利用に基づく類型と学生の受講態度との関連". 日本教育工学会論文誌, 46 (4), 653-666, (2023).
- (6) 長岡健, "対話型大規模講義のオンライン化 -受講生/教員間インタラクションに関する考察-", 2020 PC Conference 論文集, 251-254. (2020).
- (7) 文部科学省, "新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の 学生生活に関する調査 (結果)", [https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf) (2021)
- (8) 植原啓介, "慶應 SFC における遠隔授業とアンケート調査結果", [https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200605-5\\_Uehara.pdf](https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200605-5_Uehara.pdf), (2020).
- (9) 法政大学経営学部, "経営学部 カリキュラム概要", <https://www.hosei.ac.jp/keiei/gakka/20140401284/>.
- (10) 橋本諭, "組織論入門 (2023 年度シラバス)", 法政大学経営学部, (2023).